

本が死ぬと「ころ」暴力が生まれる

バリー・サンダース著

杉本 駿訳（新曜社・二八五〇円）

社会を「脱学校化」すべし、と敬愛するイヴァン・イリイチのようにいえた時代はまだよかつた、と本書の著者で思想史家のバリー・サンダースはなげく。もしかれば日本人だったら、書を捨てて街にでようと寺山修司のようにいえた時代はまだよかつた、と書いていたかも知れない。

本にくみ、学校を捨てて街にでた若者たちは、いまや、なんの「良心のとがめも後悔も」なしに、銃撃、殺し合い、強姦^{タガサカ}、拷問、麻薬などの暴力行為にふけっている。すべてはコンピューターのせいだ、あるいは、コンピューターと密接にむすびついた映画やTVやファミコンのせいなのだ、というのが著者の意見。そして、おいおい、それはちょっと単純すぎるんじゃないの、といふのが私の意見である。

それにしても、へんな本だ。白と黒の単純な正確さしか知らないコンピューターとはちがい、人間の言語は多義的なジョークや笑いのためにあると主張する人の文章に、笑いや冗談がまったく存在しない。かわり

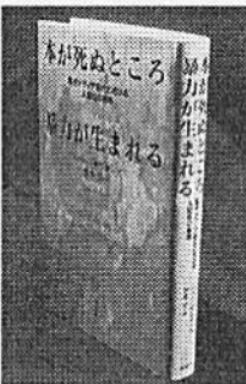
にあるのが偏狭な聖職者のような善と悪との二元論的断罪。暴力におぼれる若者たちを「全く異なる種類の人間」（つまりはエイリアン）と断じ、文字テキストはコンピュータートと「同じ空間を占めることができない」とい捨ててる。単純すぎる。まるでコンピューターみたい。

いまの若者は、赤ん坊のころから母親が語ってくれるお話のかわりに、TVやコンピューター・ゲームの強烈な刺激にかこまれて育つてきた。そのせいでかれらは、西欧世界における□承文化と文字文化の長い歴史がつくりあげた「人間」になるチャンスを失つてしまつたかに見える。「未成年の社会病質者で満たされた国家を想像」せよ。このままいけば「私たちが知つてゐる意味での人間」は地球上から消滅してしまうぞ。

こいつうことはあまりいいたくないな
いが、私は西欧人ではないので、この種の、あまりにも西欧中心的な危機感の表明にはうまく共鳴できない。コンピューターといふの発明に震撼させられて、なにが本か、なに
が人間か。



Barry Sanders 加州クレアモントのピシアー・カレッジの教授。著書に『ABC—民衆の知性のアルファベット化』など。



評者・津野 海太郎（評論家・「本とコンピュータ」編集長）